

# 古今和歌集元永本における短歌表記の漢字

石 井 久 雄

平仮名・片仮名が9世紀に成立して、日本における漢字は、漢字のみで生きるばかりでなく、一文章においても仮名と共存して生きることをしなければならなくなった。一方において、片仮名交じり文では、仮名を潜り込ませつつ、漢字が主体であった。そこで仮名が担ったものは、主として活用語尾・助動詞・助詞である。現代の様相はそれを継ぐものであるかもしれない。といった程度のことは、われわれに周知である。他方において、仮名文では、仮名が主体であるところに、漢字が入り込んでいる。その仮名文において漢字がどのように生きていたのか。それについてのわれわれの知識は豊かでない。仮名が成立したに近いところでの知識の闕を少しでも補おうと踏み出してみるのが、この小考である。

具体的には、古今和歌集の1120元永3年・伝源俊頼筆写・東京国立博物館現蔵本について、和歌を記す漢字を、量的に取り上げる。本稿の言わば結論は、稿終わり近くにある表3である。他の部分はその注釈であって、おおかた退屈なものであろう。

## 1——問題の設定

仮名が成立したところを扱うと言って、10世紀初頭成立の古今和歌集を取り上げるのはよいであろう。しかしながら、元永本は、古今和歌集成立から既に200年以上を経ての筆写であり、よい資料とは容易に言うことができない。それにもかかわらず元永本を取り上げるのは、仮名を中心にとまとめた量で完結し、筆写の年代が明瞭なものとしては早いからである。

もとより、われわれは、土佐日記を知っているが、日付が漢字表記であるという様式があるので、後日、取り上げることとしたい。高野切を初めとする種類の零本古今和歌集は、量が必ずしもまとまらないうえに、筆写年代が不明瞭であり、伝公任筆写本古今和歌集や西本願寺本三十六人集は、量がまとまるが、やはり筆写年代が明瞭でない。今は元永本で課題を見、それを基礎としてすべて後考に俟ちたく思う。特に伝公任筆写本古今和歌集は、元永本の仮名遣いを扱った遠藤(2006)もともに取り上げるところであり、倣って早早に取り上げたい。ただし、伝公任筆写本の和歌の漢字は、元永本と比べておとなしやかである。なお、詞書等における漢字についても、元永本のものを含めて、検討を先送りする。

本文は二玄社（1994）の写真により、読解には築島・他（1994）を参照する。ただし、築島・他と、読みかたが異なるところもある。徳永（1990）・（1995）は、築島・他に従事しつつも、違う読みを示したところがあり、読み幅があることは許されるであろう。

さて、ここに大きく設定した問題は、本稿の独創ではもとよりなく、多くの研究者が意識し、検討してきたものである。夙に包括的に論じた小林（1961）は、次のように記している。

本稿の当面の意図は、平安時代における、平仮名を主たる文字とした文章の表記様式の実態を解明するにある。平安時代を選んだのは、平仮名が考案された時を含みまたそれに尤も接近するからである。その様式が、もし、かつて説かれ、また最近でも説かれるごとく、厳密な意味での「平仮名専用」が全てに用いられたとするならば、本稿の意義は殆どなくなろう。しかるに事實は、いわゆる消息・物語等の実用文には、特定の漢字を含む。その漢字の性質は如何であるか。平仮名と漢字との一文中における比率・交渉の考察が、したがって、本稿では主要な部分をなすことになった。（44 p. 54）

そうして、次のように結論する。

平安時代の平仮名文は漢字を交える様式が一般的で根幹をなす。その漢字は拗音・舌内入声音・三内撥音等の特定の字音語の表記である。後半期以後は、形式語、頻出しかつ総体として画数の少ない和語の漢字表記も加わった。平仮名専用文は、字音語を含まない和歌の表記に見られたが、和語の漢字表記が始まる以前の限られた時期の用であったろう。

（44 pp. 52-53、摘要）

元永本古今和歌集については小林も取り上げたところであるが、徳永（1990）・（1995）が、築島・他（1994）の総索引作成に携わった経験を踏まえて、数量・事例を挙げつつ詳しく追究し、次のように結論する。

元永本における漢字表記については、その用法の大部分は小林博士が出された報告に合致している。しかし、ある特定の巻・部分に集中的にいわゆる「万葉書」を多用した歌が見られる。

（1995年 p. 560、摘要）

小林も徳永も、それぞれが指摘した現象について、原因を求めることもしている。本稿は、しかし、原因には関心を持たず、徳永が示したような数量を確実に見て、今後の議論の基礎を固めることを目指す。ただし、本稿に示すのとはほとんど同じ数値を、遠藤（2005）もすでに示している。

## 2——短歌の数

元永本古今和歌集の本体における歌数を、巻ごとに表1に示す。定家本系統を基準とし、定家本系統歌数に増減（ ）内の演算を施すと、元永本総歌数である。例えば、巻四秋上では、定家本系統80首に対し、そのうちの2首を外して別に1首を加えると、元永本の総歌数79首と

表1 古今和歌集の和歌の数

	定家本歌数	増 減	元永本総歌数	完全数	欠損数
卷一 春上	68		68	61	7
卷二 春下	66	( + 2 )	68	62	6
卷三 夏	34		34	30	4
卷四 秋上	80	( - 2 + 1 )	79	72	7
卷五 秋下	65	( - 3 + 2 )	64	58	6
卷六 冬	29		29	25	4
卷七 賀	22		22	21	1
卷八 離別	41	( + 1 )	42	32	10
卷九 羈旅	16	( + 1 )	17	16	1
卷十 物名	47	( - 1 + 4 )	50	35	15
卷十一 恋一	83	( - 1 + 1 )	83	63	20
卷十二 恋二	64		64	60	4
卷十三 恋三	61	( - 1 + 2 )	62	57	5
卷十四 恋四	70	( - 2 )	68	58	10
卷十五 恋五	82	( - 1 + 4 )	85	82	3
卷十六 哀傷	34		34	30	4
卷十七 雑上	70	( + 1 )	71	69	2
卷十八 雑下	68	( - 1 + 1 )	68	63	5
卷十九 雑体	68	( + 4 )	72	60	12
うち 短歌	59	( + 3 )	62	57	5
卷二十 御歌	32		32	31	1
合 計	1100	( - 12 + 24 )	1112	985	127
うち 短歌	1091	( - 12 + 23 )	1102	982	120

なる。元永本では、汚損して文字を読むことができない箇所が少なからずあり、また文字の脱・衍も少なからずあって、そのような欠陥を一首中に含む歌を表記欠損とし、一首全体を完全に読むことができるものを表記完全とすることとする。その歌数が欠損数・完全数である。巻四では欠損数7首である。巻十九雑体には定家本系統で長歌5首・旋頭歌4首があり、それを除く短歌のみの数も、巻十九および合計に示す。なお、序文の歌は見ず、また、定家本系統の墨消歌は対比の基準とせず、元永本の位置で数える。

ついでをもって記すならば、元永本では定家本系統の墨減歌11首中の6首を見ることができ、それぞれ次のように配置されている。次で、ハイフン「-」の前は巻序、後は国歌大観番号であり、そのみを示す。

定家本	10-1101	元永本	10-425の次
	10-1103		10-447の次
	10-1104		10-459の次
	10-1105		10-462の次

13-1108 13-649の次

13-1109 さらにその次

巻十および巻十三で元永本が定家本系統に比して増加になっている4首・2首は、いずれも墨減歌であるということである。

元永本には、重複して挙げられた短歌が3首あって、重複していても一つ一つに数える。内容からすれば、元永本の歌数は、示した集計より3首少ないことになるであろう。重複は次のようであり、歌の引用に当たって、句の境界として空白を私に置く。

5-264 ちらねとも かねてそしるき もみちはゝ いまはかきりの いろと見つれば

ちらねとも 兼てそ惜き 紅葉は いまはかきりの 色とみつれば

8-400 あかすして わかるゝそての しら玉を きみかかたみと つゝみてそ行

あかすして わかれしそての しらたまを きみかゝたみと つゝみてそ行

18-996 わすられむ 時しのへとそ 浜千鳥 行へもしらぬ あとをとゝむる

わすれなむ ときしのへとそ はま千とり ゆくへもしらぬ あとをとゝむる

264番歌・400番歌はここに掲げたように連続し、996番歌は第1に挙げたほうが巻十五801番歌の後にある。264番歌第3句「もみぢばは」は、第2のほうで脱字があると見られ、後に脱字を取り上げて述べる。264番歌の第2のほうは表記欠損であり、他はいずれも表記完全である。

元永本に見えない和歌12首を、念のために、巻序および国歌大観番号で掲げる。

4-193 4-247 5-254 5-258 5-266 10-439

11-491 13-664 14-684 14-712 15-764 18-958

なお、遠藤(2005)と短歌数が違うので、覚えとして一言する。遠藤は短歌数を1107首とし(p. 224)、それぞれが何行で書かれているかということを調べて、歌数を巻別に集計している(p. 226)。本稿では短歌数は1102首であり、遠藤のその巻別集計に照らして、両者の違いは巻十九にあることが知られる。遠藤の集計の巻十九分を引用し、そこに本稿で数えたものを添える。遠藤は旋頭歌を数えたのではないかと推測されるので、旋頭歌の数も添える。

	合計	一行書	二行書	三行書	四行書	五行書	六行書	七行書
遠藤	67		20	22	18	4	2	1
本稿	62		20	18	16	5	2	1
旋頭歌	5			3	2			

本稿の短歌数に旋頭歌数を加えても、三行書き・五行書きで歌数が遠藤に一致しない。行の認めかたの違いもあるであろうが、これ以上には立ち入らない。短歌の数といった、明白でありそんなことがらでも、違いが出てくるものであるということを心得ておくこととしたい。

\*

汚損、あるいは脱字・衍字などの誤字について、基準および処理の実際を述べる。処理する

人によって短歌の数に違い出るとは、予想しにくいだが、汚損の判断や誤字の認定には、むしろ違いが出るものであると思われる。ここに述べるのは、本稿の基準である。

#### a——汚損

汚損の状態は、字が全く見えないもの、一部が見えながらも全体の形が推測できないもの、一部ではあるが全体を推測しうるもの、ほとんど全部が見えているもの、など、多様にありうる。本稿では、仮名では字母が推測できる程度のもの、漢字では字形全体が推測できる程度のものは、汚損のうちを含めず、他に表記欠損と見るべき箇所がなければ、表記完全とする。次の下線部は、特別な判断をする。

10-467 後蒔の おくれてお□る 苗なれと あたに□ならぬ 田のみとそ聞  
すなわち、この下線部は、短歌本体では文字が判断できないが、墨が対面に写っていて、字形が明らかである。ただし、この467番歌は、第2・4句に、字形が判断できずに「□」で示した文字があり、全体としては表記欠損である。

汚損している状態の例として、二三挙げる。上に準ずるならば「□」で示すべきであるが、文字を推測して下線を施す。漢字と推測されるものもある。

- 1- 8 はるのひの ひかりにあたる 花なれと かしらのゆきと なるそわひしき  
1- 11 はるきぬと 人はいへとも うくひすの なかぬかきりは あらしとそおもふ  
1- 44 としをへて はなのかゝみと なるみつは ちりかゝるをや くもるといふらむ

#### b——脱字

脱字には、次のように明瞭なものもある。下線部が原本にない。

- 1- 31 はるかすみ たつをみすてゝ 行かりは 花なきさとに すみやならへる  
1- 46 むめか香を そてにうつして とめたらは 春はすくとも かたみならまし  
1- 66 さくらいろに ころもはふかく そめてきむ はなのちりなむ のちのかたみに  
31番歌に「す」としたものは、書かれていれば漢字であった可能性もないではない。46番歌「た」、66番歌「の」は、仮名であったであろう。これら3首は、これらの脱字により、いずれも表記欠損である。なお、66番歌第3句は、見掛けは「そめてきむ」であり、その「よ」は見せ消ちをしている。本稿では、見せ消ちは、元にあった文字も見せ消ちの符号も、原文になかったということにして、無視する。

次のそれぞれの第3句には脱字があると見る。

- 5-264 ちらねとも 兼てそ惜き 紅葉は いまはかきりの 色とみつれば  
15-800 いまはとて 君かゝれなは 吾屋の 花をはひとり みてやしのはむ  
これらは、次のそれぞれの第3句と対比して、「ゝ」「戸」に当たるものがないと知られる。  
16-840 十月 しくれにぬるゝ 紅葉はゝ たゝわひゝとの なみたなりけり

6-318 従今者 尽てふら南 吾家戸の 薄おしなみ ふれる白雪  
次の第4句の「夜」は、「夜る」の「る」が落ちたものであると見る。

12-605 手もふれて 月日へにける しらまゆみ おきふし夜は いこそねられね  
下の衍字で述べるように、漢字「夜」を用いて名詞「よる（夜）」を記すのに、仮名を伴わせて「夜る」とするのが元永本であり、この605番歌の「夜」の右下には「る」の補入がある。本稿では、和歌本体の文字のみを扱い、右傍・左傍を見ない。

次の下線部も原文になく、脱字である。

15-797 いろみえて うつろふものは よ中の 人の情の 花にそありける  
議論の余地はないようであるが、脱字としない事例を直ぐ次に取り上げるので、それとの関連で先立って触れる。「よのなか（世中）」は、漢字を用いて記した他のばあいは、

2-71 のこりなく ちるそめてたき さくら花 あきて世中 はてのうければ

16-834 ゆめとこそ いふへかりけれ よの中に うつゝある物と おもひけるかな  
のように、「世中」6件、「よの中」5件である。「世中」では、助詞「の」を漢字表記が吸収していると見て、「の」を脱字であるとしなない。797番歌「よ中」を「世中」に準じて扱うことができなくもないが、仮名「よ」が助詞を吸収しているというのは、抵抗感がある。つまり「よ中」は「よの中」の「の」が脱落したと扱うこととする。

b' —

以上のような脱字に対して、次では、下線部2字の間に脱字はないと判断する。

1-3 はるかすみ たゝるやいつこ みよしのゝ 吉野山に ゆきはふりつゝ  
すなわち、助詞「の」が記されていてもよかったが、「吉野」という漢字表記のうちに吸収されていると見る。同様に、漢字に助詞が吸収されていると見て、脱字としないものを、列挙する。下線部は原文に書かれていない。

2-91 はるのいろは かすみにこめて みせずとも 香をたにぬすめ 春の山風

13-623 みるめなき わか身をうらと しらねはや かれなて海人の あしたゆくゝる

15-790 時過て かれ行く小野の あさちふに 今はおも火そ たえすもえける

17-881 ふたつなき ものとおもふを みなそこに 山の葉ならて 出る月かけ

17-882 天の原 雲の水尾にて 早ければ 光とゝめす 月そ流るゝ

17-886 磯の上 古柄小野の 本柏 本の心は 忘られなくに

17-887 いにしへの 野中の石水 ぬるければ 本の情を 知る人そくむ

19-1059 よひのまに いてゝいりぬる みか月の われてものおもふ ころにもあるかな

17-907 梓弓 磯辺の小松 誰か世にか 万代兼て 種を蒔けむ

17-924 誰か為に ひきてさらせる ぬのなれや よをへてみれと ゝるひともなし

17-929 風ふけは 所もさらぬ 白雲は 世を経て落る たきにそ在ける

2- 122 春早雨に にほへるいろも あかなくに 香さへなつかし やまふきの花

17- 917 すみよしと 海人は云とも なかゝすな 人わすれ草 おふといふなり

「世中」についてbに触れた。ここにも挙ぐべきであるが、煩を厭って省く。同様に「我が」が「が」を伴っていないものなどについても、省く。

用言の活用語尾、特に動詞の連用形・終止形・連体形のもの、語幹を漢字で記したならば記さないことが、元永本に限らずに古典に普通である。挙例は省略する。ただし、次の下線部は見えないが、活用語尾を超えて靡きあるいは助動詞に及ぶ。いずれも脱字としない。

19-1017 秋来れは 野辺にたはるゝ 女郎花 いつれ人か つまて可過

19-1023 従枕 従跡こひの せめ来れは 床中にこそ おき居られけれ

4- 183 従今日は 今来む歳の 昨日をそいつ鹿とのみ 待可渡

14- 691 今来むと 云し許に 九月の 在明の月を 待出鶴鉤

4- 182 今はとて 離別る時は 銀河 わたらぬ前に 袖そひちぬる

8- 405 したの帯の みちは方々 別る口も 行めぐりても 逢はむとそ思

15- 771 いまこむと 云ひてわかれし 朝より 思くらしの ねをのみそなく

17- 904 千磐破 宇治の橋守 なれをしそ 悲とは思 年の経ぬれは

17- 905 我見ても ひさしく成ぬ 住吉の 岸の姫松 幾世経ぬ濫

17- 906 住吉の 岸の姫松 人ならば 幾代か経しと 云麻子鬼尾

次は、形容詞の連体形語尾で、珍しく思われる。

17- 928 おちたきる たきのみなかみ としつもり 老にけらしな 黒きすちなし  
字余りが関係しているときの「い」も、脱字としない。

7- 343 わか君は 千よにましませ さゝれいしの いはほとなりて こけのむす左右

11- 549 人めもる 我かは綾な 花すゝき などとかほにいてゝ こひをせさらむ

18- 949 よのなかを いとふやまへの くさきとや あなうの花の いろにいてにけむ

20-1073 しはつやま うちいてゝみれは かさゆひの しまこきかくる たなゝしをふね

549番歌は、第4句「とと」の2字中の一方が衍であり、その衍によって表記欠損である。

次は特別のものである。初句「明日」で「あすか」と読み、脱字があるとはしない。

18- 990 明日河 ふちにもあらぬ 吾やとも せにかはりゆく ものにさりける

bに挙げた264番歌「紅葉は」および800番歌「吾屋の」ように、他に対比するものがあれば、脱字とする可能性がある。

### c——衍字

衍字にも、明瞭なものがある。下線部は、原文にそのようであり、1字が衍である。

1-24 ときはなる まつのみとりも はるくくれは いまひとしほの いろまさりけり

当の2字は、字母も同じ「久久」であり、行末および直後の行頭に位置する。元永本では衍字

と見られるものが20件程度あり、その半数はこのような改行位置にある。

c' —

衍字でないと判断したものを掲げる。下線部が原文にあるが、衍字としないことには問題があるかもしれない。

- 5-281 さほ山のは > そのもみち > りぬへみ 夜るさへみよと 照す月かけ  
 5-297 みる人も なくてちりぬる おく山の もみちは夜るの にしきなりけり  
 11-526 こひしねと するわさならし ぬはたまの 夜るはすからに ゆめにみえつ >  
 11-543 あけたては せみのをりはへ なきくらし 夜るはほたるの もえこそわたれ  
 13-616 おきもせず ねもせて夜るを あかしては 春のものとして なかめくらしつ  
 13-657 かきりなき おもひのま > に 夜るはこむ ゆめちにさへや 人はとかめむ  
 12-554 糸とせめて 恋しき時は うは玉の 夜るのころもを かへしてそきる  
 11-485 かりこもの おもひみたれて 我れ恋と 妹しるらめや 人しつけすは  
 12-580 秋き>りの はる > 時なし 心には たちゐのそらも おもほえなくに  
 18-945 しらくもの たえすたなひく 岑に谷に すめはすみぬる よにこそありけれ

名詞「よる(夜)」を記すのに漢字「夜」を用いたものは、ここに挙げた7件、bに脱字があるとした605番歌「夜」1件、および次の1件で、すべてである。

- 11-470 □にのみ きくのしらつゆ 夜□□おきて ひるはおもひに あへ□けぬへし

この第3句は「よるはおきて(夜起)」が期待されるが、原文の「夜」下半分から汚損があり、直後を「□□」としたものの、実は1字か2字かも分からない。ところで、そもそも、「夜る」における「夜」は、仮名「よ」であると考え余地もある。本稿では漢字とする。

名詞「われ(我)」は、漢字「我」を用いたものが短歌で21件・旋頭歌で1件あるが、仮名「れ」を添えたものは、ここに挙げた1件のみである。他は例えば次のようである。

- 11-508 いて我を 人なとかめそ 大舟の ゆたのたゆたの ものおもふころを  
 副詞「いと(甚)」を漢字「糸」で記したものは、上のほかに1件あって、漢字のみである。  
 15-765 わすれ草 たねとらましを 逢事の 糸かくかたき 物としりせは  
 助詞「だに」を漢字「谷」で記したものは、上のほかに3件あって、いずれも漢字のみである。

- 2-134 けふのみと はるをおもはぬ 時谷も たつことやすき 花のかけかは  
 15-767 ゆめに谷 あふことかたくなりゆくは われやいをねぬ 人やわする >  
 18-972 野とならば うつらとなりて なきをらむ かりに谷やは 君はこさらむ

次は長歌の第19-22句である。第22句に「>、\」で示した重点は一の字点が3個並び、仮名3字「つもり」に対応すると見るべきであろう。「り」は衍字であることになる。しかし、ここでは、重点が「つも」のみに対応するとし、「り」は衍字でないとすることにする。

19-1005 冬くさの うへにふりしく ゆきの つもりゝ、りて  
 なお、この第21句は「しらゆきの」の「しら」が脱落している。

#### d——誤字

誤字は、単純なものもあるが、異文でありうるものもある。その区別が必ずしも容易でない  
 ので、明瞭な脱字・衍字を除き、次の下線部のように誤字と言い切ってよさそうであるものも、  
 表記欠損の理由としない。「■」は汚損であり、元が漢字であったと推測される。

1- 55 みてのみや ひとにかたらむ やまさくく てことにをりて いへつとにせむ

6-321 ふるさとは よしのゝ山の ちかければ ひと日もみ行 ふらぬ■はなし

55番歌は正しくは「やまざくら（山桜）」であるが、問題の箇所一字は、衍字「く」と脱字「ら」  
 との複合であるかもしれない。321番歌は「みゆき（深雪）」であり、その限りでは表記欠損と  
 しないが、第5句に汚損があつて、歌全体としては表記欠損である。

#### e——巻一の欠損の事例

元永本巻一の欠損数7首として数えたものは、以上の例示ですべてを尽くしたことになる。  
 念のために、国歌大観番号順に並べておく。国歌大観番号のあとの数字は句順を示し、当面す  
 る句のみを掲げる。

1-8-5 汚損 「なるそわ□□□」

1-11-1・2 汚損 「はる□ぬと」「■□いへとも」

1-24-3 衍字 「はるくくれは」

1-31-2 脱字 「たつをみてゝ」

1-44-5 汚損 「くもるといふ□む」

1-46-4 脱字 「かみならまし」

1-66-5 脱字 「のちかたみに」

### 3——漢字の概要

以下、表記完全である短歌982首を専ら取り上げる。しかも、短歌本体のみを取り上げ、詞  
 書・作者・補入・校異・左注等の記述を顧みない。見せ消ちは、元にあつた文字も見せ消ち符  
 号も見ない。例えば、巻一末尾の一首は、全体が次のように構成されている。

1-68 亭子院の哥合に

いせ

みるひともし なきおく山の さくらはな ほかのちりなむ のちそさかまし  
 なきやまさとのとも

左注「なきやまさとのとも」は、第2句の異文を言ったものであり、後に訂補されたよりは、筆写当初の元永本を構成していたと見受けられる。さて、しかし、この事例のうちで本稿に取り上げるのは、短歌本体「みるひと……のちそかまし」の30字のみである。

表記完全である短歌982首を記した文字の統計値は、次のようである。

	異なり	延べ	一字当たりの出現頻度の					
			平均	最大	四分位	中央	四分位	最小
全体	360	28913						
仮名	49	26873	548.4	1511	706	473	332	56
漢字	311	2040	6.5	186	6	2	1	1

仮名の異なりが47字を超えるのは、「ん」は設けないものの、重点の一の字点およびくの字点を仮名2種として扱うからである。仮名と漢字とを混じえた全体の平均値・中央値などは、算出しても意義がないと思われる。実際、出現頻度が大きいほうに仮名が偏り、すなわち、仮名の42字はどの漢字よりも出現頻度が大きく、漢字の308字はどの仮名よりも出現頻度が小さくなっていて、出現頻度順に文字を一覧したときに仮名・漢字が入り交じるのは、全体順位43から52までの仮名7字・漢字3字に過ぎない。

漢字を出現頻度順に表2に一覧する。例えば、順位10の箇所は次を示す。

出現頻度32すなわち出現比率15.6% (=出現頻度/漢字延べ) の漢字が3字あって、

「行」「夜」「恋」であり、

それよりも出現頻度が大きい漢字9 (=順位-1) 字と当の3字との累積比率が

383.0% (= (順位1から当の順位までの出現頻度×漢字数の総和) / 漢字延べ) である。

出現比率・累積比率は千分率であり、その小数第2位以下を切り捨てる。出現頻度に偏りが大きくて上の四分位数で窺い難いところも、この表2で知られる。すなわち、出現頻度20以上の22字で累積50%を超え、半数に届かない153字で累積90%を超える。漢字の1/3以上は出現頻度1であり、1/2以上は出現頻度2以下である。

文字一一が何を記しているかを検討しなければならないが、本稿では、試みに、次に出現順位10までの漢字12字につき、読みや用法の頻度を示すに止める。

人 出現順位1 頻度186 比率91.2%

ひと・びと182 「海人」あま3 誤歟1

「ひと」または「びと」と読む漢字「人」が182件あり、「あま」と読むべき「海人」が3件ある、ということを示している。「誤歟」とした1件は次の下線部であり、この漢字「人」の右傍に「わか」とある。右傍は「人に」に対する異文注記であると見られる。

8-378 くもるにも ふかき心の おくれねは 人にると人に みゆ許なり

山 出現順位2 頻度119 比率58.3%

やま118 「山葉」やまのは1

「山葉」は、2節b'に挙げた17-881番歌のものである。

表2 漢字一覽（出現頻度順）

比率は千分率%、小数第2位以下切り捨て

順位	出現頻度	比率	漢字数	累積比率	漢字
1	186	91.2	1	91.2	人
2	119	58.3	1	149.5	山
3	95	46.5	1	196.1	花
4	55	26.9	1	223.1	秋
5	51	25.0	1	248.1	風
6	48	23.5	1	271.7	身
7	47	23.0	1	294.7	心
8	46	22.5	1	317.3	我
9	38	18.6	1	335.9	思
10	32	15.6	3	383.0	行 夜 恋
13	30	14.7	2	412.4	今 日
15	28	13.7	2	439.9	月 春
17	25	12.2	1	452.1	時
18	24	11.7	1	463.9	水
19	22	10.7	2	485.5	千 南
21	21	10.2	2	505.6	葉 露
23	19	9.3	2	524.2	君 名
25	18	8.8	1	533.1	中
26	17	8.3	1	541.4	見
27	15	7.3	3	563.5	云 年 物
30	14	6.8	1	570.3	玉
31	13	6.3	2	583.1	雪 待
33	12	5.8	5	612.5	事 世 知 野 歟
38	11	5.3	8	655.7	河 許 在 松 神 朝 覽 々
46	10	4.9	6	685.1	衣 霞 吹 冬 夢
52	9	4.4	6	711.6	子 色 白 本 木
58	8	3.9	3	723.3	女 染 鶴
61	7	3.4	6	743.9	吾 草 尾 無 来
67	6	2.9	12	779.3	雨 猴 過 寒 去 經 御 桜 小 谷 誰 明
79	5	2.4	7	796.4	何 鬼 糸 十 惜 大 老 歲 手 住 誰 明
86	4	1.9	22	839.6	夏 火 海 原 後 島 兼 八 五 鳥 憑 鴉 家 鴨 幾 宮 弓 居 虛 織
108	3	1.4	33	888.1	右 岸 共 金 兼 代 立 越 景 借 度 輻 隱 宇 羽 延 煙 音 下 可 角
141	2	0.9	57	944.0	出 方 逢 橋 昨 袖 霧 葦 郭 銀 坂 是 只 破 忘 里
198	1	0.4	114	1000.0	梓 曉 蒔 男 有 綾 刈 九 三 清 池 梅 麻 離

花 出現順位 3 頻度95 比率46.5%

はな94 「女郎花」をみなへし1

秋 出現順位 4 頻度55 比率26.9%

あき55 「秋き」あき1

「秋き」は、2節c'に挙げた12-580番歌のものである。

風 出現順位 5 頻度51 比率25.0%

かぜ51

身 出現順位 6 頻度48 比率23.5%

み48

心 出現順位 7 頻度47 比率23.0%

こころ44 「心地」こころ3

我 出現順位 8 頻度46 比率22.5%

わが25 われ20 「我が」わが1

思 出現順位 9 頻度38 比率18.6%

おもふ20 おもひ8 おもへ4 「不思」おもはず1 「思は・ひ・へ」おもは・ひ・へ5

行 出現順位10 頻度32 比率15.6%

ゆく20 ゆき6 ゆか2 ゆけ2 「行か・く」ゆか・く2

夜 出現順位10 頻度32 比率15.6%

よ19 「夜る」よる7 「夜は」よは(夜半)1 「夜み」よひ(宵)2 「今夜」こよひ3

「夜る」については、2節b・c'で触れた。

恋 出現順位10 頻度32 比率15.6%

こひ18 こふ2 「恋る」こふる1 「恋々て」こひこひて2

「恋しき・かり・かる」こひしき・かり・かる9

ところで、徳永(1990)は、短歌本体のみでなく詞書・左注等・序文・内題までを含む元永本古今和歌集全文について、漢字を計量し、概要を報告している。漢字は異なり約612、延べ約6700であるということである。出現頻度が大きいものは、次のように示される。

人465 哥195 山185 花172 時160 読124 第110 御100 風81 身77 ……

一見して短歌本体のものでないと察せられる「哥、読、第、御」もあり、本稿の結果との対比など、顧みなければならぬ課題がある。しかし、やはり別稿に送ることとする。

\*

線のまとまりを文字であると確定した後、そのまとまりというのが何という文字であるかということを確認する上で問題となることがらについて、述べる。どの問題も解釈に幅がありえ、本稿に記す数値の信頼性がどの程度の範囲のものであるかを示唆することになるであろう。し

ばしば単に「築島」として築島・他（1994）の作成本文を対比するが、批判する意図によるものではなく、諸研究の代表として最近のものを求め、寧ろ本稿のずれを測ろうとするまでのことである。

なお、漢字よりは平仮名にかかわるところが多い。

#### f ——文字の存否および解読

線の流れのうちに文字を認めるか否かが問題となるものがある。次は、小さな屈曲を認めるか否かという問題である。19-1010+とするものは、定家本系統に見えず、定家本系統卷十九1010番歌の後に元永本で配置されている。

2- 130 をしめとも とまらなくに はるかすみ かへるみちにし たちぬと思へは

19-1010+ますかゝみ そこなるかけに むゐゝゐてみる 時にこそ ……

築島は、130番歌第2句を「とゝまらなくに」と読み、1010+番旋頭歌第3句を「むかゐゝゐてみる」と読む。本稿では、130番歌はこの脱字で表記欠損であり、検討の対象から外れている。1010+番歌は、旋頭歌であるために検討の対象でなく、この脱字があるほかに同じ句のうちに「ゐゝゐ」の一字が衍であり、表記欠損である。

次は、文字そのものの存否ではなく、下線部の右傍に見せ消ち符号の小さな点を見るか否かが問題となる。

17- 896 さかさまに 年も行南 とりもあへへす 過るよはゐや 共に帰と

築島は、ここに見せ消ち符号を認めず、直後の「へ」を衍とする。本稿では、見せ消ちを認めて表記完全であると扱い、検討の対象とする。

線の屈曲をどのように見るかということは、文字の存否にかかわるほかに、一文字であることを認めたうえで、どの文字であるかを定める、ということにもかかわる。次は、助動詞「らむ」である。

3- 153 五月雨に 鬼思居は 霍公 よふかくなきて いつち行藍

15- 766 こふれとも あふ夜のなきは わすれくさ 夢地にさへや おひしける濫

17- 905 我見ても ひさしく成ぬ 住吉の 岸の姫松 幾世経濫

19-1062 よのなかも いかにくるしと 思濫 こゝらの人に うらみらるれば

築島の本文は順に「藍」「藍」「濫」「監」であり、それに照らして本稿は153番歌・905番歌で合い、766番歌・1062番歌で合わないことになる。1062番歌のものは築島がよいかとも思われ、それによるときは「監」を「藍」または「濫」の省画であると見ることとなる。

次は仮名である。

20-1096 つてはねの みねのもみちは おちつもり しるもしらぬも なへてかなしも

4- 224 はきの花 ちるらむをのゝ 露しにも ぬれてをゆかむ よはふけぬとも

1096番歌初句「て」について、字母「帝」によって結果的に誤写であると見るが、築島は「く」

とする。224番歌第5句「ぬ」について、築島は、本文を「ね」で示し、したがって後接語を助詞「ども」として処理するのではないかと思われるが、索引本体では「ぬ」「とも」で処理している。

次の第3句下線部「よ」は見せ消ちであるが、この「よ」を築島は「き」とする。

1-66 さくらいろに ころもはふかく そめてきよむ はなのちりなむ のちかたみに  
この66番歌は、第5句「のち」の後に脱字「の」があり、本稿の検討の対象からは外れる。

#### g——仮名であるか漢字であるか

そこにある文字が仮名であるか漢字であるかということは、しばしばに問題になる。元永本古今和歌集では、問題を2種類に分けることができるであろう。すなわち、第一は万葉書きであり、第二は、一音の字訓としても仮名としても見られるものである。本稿では、しかし、どちらについても未だ方針を立てることができず、以下、事例を幾つか挙げるに留め、説明を省く。

次は、万葉書きにかかわり、下線部の漢字・仮名としての見かたが築島と逆になる。

4- 183 従今日は 今来歳の 昨日をそ いつ鹿とのみ 待可渡

6- 318 従今者 尽てふら南 吾家戸の 薄おしなみ ふれる白雪

6- 317 夕去者 衣手寒 御吉野の 吉野>山に 御雪ふり管

一音の字訓としても仮名としても見られるものは、本稿は概ね漢字と見ている。例えば、次の「千」は築島も漢字とする。

7- 345 しほの山 さしてのいそに すむ千鳥 きみかみよをは 八千代とそなく

7- 361 千鳥なく さほのかはきり たちぬらし やまのもみちも いろまさり行

15- 801+わすられむ 時しのへとそ 浜千鳥 行へもしらぬ あとをと>むる

2- 096 いつまでか のへにこ>ろの あくかれむ はなしちらすは 千世もへぬへし

しかし、次は、築島は仮名「ち」とすし、直後が仮名であることに拠る扱いであろう。

1- 28 も>千とり なくなるはるは ものことに あらたまれとも われそふり行

18- 996 わすれなむ ときしのへとそ はま千とり ゆくへもしらぬ あとをと>むる

7- 343 わか君は 千よにましませ さ>れしの いはほとなりて こけのむす左右

7- 350 かめのをの 山のいはねを とめておつる たきのしらたま 千よのかすかも

次は、表記の慣用の可能性を考えて漢字とする。築島でも漢字である。

17- 881 ふたつなき ものおもふを みなそこに 山葉ならて 出る月かけ

17- 884 あかなくに またきもつきの かくる>歟 山の葉にけて いれすもあらなむ

19-1068+てるつきを ゆみはりとしも いふことは 山の葉さして いれはなりけり

## h——省画あるいは転用

漢字「女」および「景」は、上の漢字の用法等の記述に倣うならば、次のようである。

女 出現順位52 頻度9 比率4.4%

「織女」たなばた3 「女郎花」をみなへし1

「女何に」いかに3 「女何でか」いかでか1 「女何とぞ」いかがとぞ1

景 出現順位141 頻度2 比率0.9%

かげ1 「月景」つきかげ1

「女」は、「女何に」以下のものを「如」として分離すべきであるかとも思う。もし分離するならば、漢字の異なりが一つ増え、「女」が出現順位を下げる。「景」は、すべて「影」としてもよく、こちらでは異なりの増減もない。それら「如」「影」に対しては、「女」「景」は省画であることになる。

## i——仮名「ん」

仮名「ん」は設けない。形としては多に見られるが、脈絡で「む」「も」に読み分ける。

## j——重点

重点は、形とその組み合わせとで7種類になると見られる。

一の字点一個 二の字点一個

一の字点二個 一の字点三個 一の字点および二の字点

くの字点（前字右傍で起筆） くの字点（二の字点を前字右傍および当処に置く）

反復される主流は、一の字点一個で仮名一字、二の字点一個で仮名一字または漢字一字、その他で二字以上であり、二字以上には漢字を含むこともある。形を問題にしながら翻刻で事例を示しても用が足りないが、重点を「々」「ゝ」「ゝ、」の3種で翻刻し、問題の部分に下線を施す。

一の字点一個——

1- 18 かすかのゝ とふひのゝもり いてゝみよ いまいくかありて わかなつみてむ  
次の1件では漢字を反復したと見られるが、直前を漢字「見」でなく仮名「み」であると扱うのがよいかもしれない。

6- 342 行としての 惜くもあるかな ますかゝ見 々るかけさへに くれぬとおもへは  
二の字点一個——

8- 374 あふさかの せきしまさしき 物ならば あかすわかるゝ 君をとゝめよ

4- 176 恋々て あふ夜は今夜 あまのかは きりたちわたり あけすもあらなむ

一の字点二個——

9- 409 ほのゝ、と あかしのうらの 朝霧に 島かくれ行 舟をしそ思

- 13- 617 つれゝゝの なかめにまさる なみたかは そてのみひちて あふよしもなし  
 14- 705 かすゝゝに おもひおもはず とひかたみ 身をしるあめは ふりそまさらむ  
 14- 740 あふさかの ゆふつけとりには あらはこそ きみかゆきゝを なくゝゝもみめ  
 16- 857 かすゝゝに 我をわすれぬ ものならは 山の霞を あはれとはみよ  
 20-1083 みまさかや くめのさらやま さらゝゝに わかなはたてし よろつよまてに  
 1- 16 のへちかく いへゐをすれは うくひすの なくなるこゑを 朝なゝゝ聞  
 11- 513 朝なゝゝ 立河霧の 虚にのみ うきて思の 在るよなりけり  
 19-1011 むめの花 みにこそきつれ うくひすの 人くゝゝと いとひしもをる

一の字点二個は、連綿では記されない。以上の事例のほかに、表記欠損で14-679-3「なかゝゝに」・10-450-4（下掲）、長歌で19-1006-16「ひとゝゝは」、長歌の表記欠損で19-1005-18「むらゝゝみゆる」があり、以上で一の字点二個の全事例を示したことになる。漢字を含めて直前の2字を繰り返すと見ることができが、表記欠損の450番歌のものが例外である。

- 10-450 □なの色は たゝひとさかり こけれ□□ 返ゝゝそ 露は染ける

一の字点三個――

- 13- 637 しのゝめの ほからゝゝと あげゆけは おのかきぬゝゝなるそわひしき  
 13- 654 おもふとち ひとりゝゝか 恋しなは たれによそへて ふちころもきむ  
 19-1013 いくはくの たをつくれはか ほとゝきす してのたをさを あさなゝゝよふ  
 19-1016 あきのゝに なまめきたてる 女郎花 穴ことゝゝし 花も一時

このほかに、表記欠損で11-515-4「かへすゝゝそ」、長歌の表記欠損で19-1005-22「つもりゝゝりて」があり、以上で一の字点三個の全事例である。一の字点三個は直前の3字を繰り返すものであるようであるが、表記完全の事例の最後1016番歌では、2字の繰り返しであって、例外となる。

一の字点および二の字点――

- 12-593 よひゝゝに ぬきてわかぬる かりころも かけておもはぬ 時のまもなし  
 上が一の字点、下が二の字点であり、ここにのみ見られる。

くの字点（前字右傍で起筆）――

- 10-432 秋たちて いまやまかきの きりゝゝす よなゝゝなかむ 風の寒さに  
 8-391 君か行 こしの白山 しらね鞆 雪の間にゝゝ あとはたつねむ  
 14-681 ゆめにたに みゆとはいはし あさなゝゝ わかおもかけに はつる身なれば

432番歌で、初めの重点は直前の「き」右下または「り」右上で起筆し、「り」の下に点乃至斜線を置いて終筆する。後も同様であって、直前の「よな」の右傍で起筆し、「な」の下で終筆する。391番歌でも、直前「間に」右傍で起筆し、「に」の下で終筆する。681番歌では「さ」右傍で起筆する。同様のくの字点はほかに14件見られ、さらに長歌で1件、表記欠損の短歌で2件、表記欠損の長歌で3件見られる。一首中に2件見られるのは、ここに示した432番歌のもの

みである。

このくの字点は、直前の2字を繰り返すものがほとんどである。ただ、681番歌で3字を繰り返すように見られるものが、表記欠損の長歌にも1件見られる。起筆は「は」右下である。

19-1001 すみそめの ゆふへになれは ひとりゐて あはれ<sup>ゝ</sup>ゝと なけきあまり  
681番歌および1001番歌は、ともに字余りに関係していて、あるいは「あさなさな」「あはれはれ」を記していると見られなくもない。

くの字点（二の字点を前字右傍および当処に置く）——

13-632 ひとしれぬ 我かよひちの せきもりは 夜<sup>ゝ</sup>ゝことに うちもねな<sup>ゝ</sup>む  
直前「夜ゝ」の右傍および「ゝ」の下で、ともに二の字点である。同様のものは、表記欠損の8-393-5「華のまに<sup>ゝ</sup>ゝ」に見られるに過ぎない。

さて、重点を「々」「ゝ」「ゝゝ」3種に分けたのは、漢字であるか仮名であるか、幾字に数えるかということに関係する。一の字点一個または二の字点一個は、どちらであっても、直前が漢字であって漢字が繰り返されていると見られるならば「々」で処理し、そうでないならば「ゝ」で処理する。次は、いずれも二の字点であり、直前が漢字であるが、漢字が繰り返されているとは見られない。

6-317 夕去者 衣手寒 御吉野の 吉野<sup>ゝ</sup>山に 御雪ふり管

14-692 月よ<sup>ゝ</sup>し 夜<sup>ゝ</sup>しと人に 告やらむ こてふに<sup>ゝ</sup>たり 待たすしもあらず

18-986 ひとふるす さとをいとひて こしかとも ならのみやこも うき名<sup>ゝ</sup>りけり

「々」は漢字、「ゝ」は仮名であり、それぞれ1字と数える。その他の重点は、繰り返される対象が仮名であれ漢字であれ、幾字であれ、「ゝゝ」で処理し、この出現1回を仮名2字と数える。この数えかたによる奇妙な結果が、一の字点三個に事例として掲げた次で顕わになる。

13-637 しの<sup>ゝ</sup>めの ほから<sup>ゝ</sup>ゝと あけゆけは おのかきぬ<sup>ゝ</sup>ゝなるそわひしき  
すなわち、この重点3箇所は、順に一の字点一個・一の字点三個・くの字点であるが、一の字点三個を2字と数えるために、31音を仮名のみ30字で記したことになる。

13-654 おもふとち ひとり<sup>ゝ</sup>ゝか 恋しなは たれによそへて ふちころもきむ  
この654番歌でも同様であるが、漢字が交じっているために、31音を仮名28字・漢字1字・合計29字で記したと言うときには、奇妙さが隠されることになる。

#### 4——仮名と漢字

表記完全である短歌982首で、文字全体の延べのうちに占める漢字の比率、いわゆる漢字含有率は、7.05% (=2040/28913) である。同じ比率は、一首平均で、文字29乃至30字における漢字2字としても得られる。3節の数値を再掲し、一首当たりの数値を加える。このことを繞って、一つ二つ検討しておきたい。

	異なり	延べ	一首当たりの出現頻度
全体	360	28913	29.4
仮名	49	26873	27.3
漢字	311	2040	2.0

一首ごとに漢字数・仮名数を見るならば、表3のようである。例えば、漢字0字である、すなわち漢字を用いずに仮名のみで記した短歌は250首であり、それを仮名数で分けると、仮名33字のもの8首、仮名32字のもの53首、仮名31字のもの188首、……である。漢字1字を用いた短歌は267首であり、そのうちで仮名31字のもの15首、仮名30字のもの68首、仮名29字のもの173首、……である。漢字数・仮名数を合計して31字であるところ、すなわち漢字0字・仮名31字の188首、漢字1字・仮名30字の68首、漢字2字・仮名29字の17首、……には二重下線を施し、合計30字であるところには一重下線を施す。

この表3における分布は最頻値や数値の偏りをよく見せ、一首平均の数値がそれとずれていることを知らしめる。短歌の全歌数の1/3以上は、仮名のみ31字による188首であるか、仮名29字・漢字1字・合計30字による173首であるかである。この数値は、ほとんど仮名の最大値および漢字の最小値である。そこで漢字の比率は1.5% (=173 / (31×188+30×173)) に過ぎない。平均値は、したがって、それに比べて仮名が少なく、漢字が多くなり、実際、一首平均の文字数と表3の最頻値のあたりとには1字以上の差が出ている。なお、漢字数・仮名数で次いで多いのは、仮名27字・漢字2字・合計29字の74首、仮名30字・漢字1字・合計31字の68首、仮名のみ32字の53首であり、ここまでで短歌数の半数を超える。

表3を左から少しずつ見て、順次、漢字の比率を計算してみる。漢字0字の250首を見ても比率は当然に0.0%である。漢字1字の267首をそれに加えて比率を見ると1.68%、さらに漢字2字の161首を加えての比率を見ると2.85%、……となる。

一首中の漢字数	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	……
漢字の比率 (%)	0.00	1.67	2.85	3.89	4.70	5.31	5.73	5.99	6.24	6.43	……

前節・本節初頭に出した漢字の比率は、全体を見たものである。書き記しかたが優勢である半数を見たところでは、漢字の比率は2%前後という印象を与えられる、ということになる。

文字数による短歌の例示をする。短歌の前に「(仮名数+漢字数) 巻序-国歌大観番号」を置く。合計が31乃至30となる(仮名数+漢字数)には、表3と同じように、二重下線または一重下線を施す。

(33+0)1-1 としのうちにはるはきにけり ひとゝせを こそとやいはむ ことしとやいはむ  
 (32+0)12-585 ひとをおもふ こゝろはかりに あらねとも くもゐにのみも なきわたるかな  
 (31+0)1-54 いしはしる たきなくもかな さくらはな をりてもてこむ みぬひとのため  
 (31+1)9-411 なにしおはゝ いさことゝはむ みやことり わかおもふ人は ありやなしやと  
 (30+1)4-220 あきはきの したはいろつく いまよりや ひとりある人の いねかてにする

表3 仮名数・漢字数から見た短歌数

仮名数\漢字数	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	
	982	250	267	161	114	72	45	25	13	11	7	2	6	3	3	2	1
33	8	8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
32	53	53	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
31	203	<u>188</u>	15	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
30	72	<u>1</u>	<u>68</u>	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
29	190	-	<u>173</u>	<u>17</u>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
28	64	-	11	<u>50</u>	<u>3</u>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
27	93	-	-	<u>74</u>	<u>18</u>	<u>1</u>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
26	55	-	-	13	34	<u>6</u>	<u>2</u>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
25	65	-	-	4	42	16	<u>3</u>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
24	38	-	-	-	14	19	4	<u>1</u>	-	-	-	-	-	-	-	-	-
23	34	-	-	-	2	22	9	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
22	27	-	-	-	1	7	16	1	2	-	-	-	-	-	-	-	-
21	13	-	-	-	-	1	7	4	1	-	-	-	-	-	-	-	-
20	13	-	-	-	-	-	3	6	3	1	-	-	-	-	-	-	-
19	8	-	-	-	-	-	-	7	1	-	-	-	-	-	-	-	-
18	6	-	-	-	-	-	-	2	3	-	1	-	-	-	-	-	-
17	5	-	-	-	-	-	1	2	1	1	-	-	-	-	-	-	-
16	8	-	-	-	-	-	-	1	1	4	1	1	-	-	-	-	-
15	5	-	-	-	-	-	-	-	1	3	1	-	-	-	-	-	-
14	3	-	-	-	-	-	-	-	1	2	-	-	-	-	-	-	-
13	3	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	1	-	-	-	-	-
12	3	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	1	-	-	-	-
11	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-
10	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
9	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-
8	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
7	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	1	-	-
6	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
5	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-

下線は文字数合計31 下線は文字数合計30 仮名27文字・漢字2字・74首の位置がほぼ平均

- (29+1)1-22 かすかのゝ わかなつみにや しろたへの そてふりはへて 人のゆくらむ  
 (28+1)8-387 いのちたに 心にかなふ ものならは なにかわかれの かなしからまし  
 (30+2)18-938 わひぬれは 身をうきくさの ねをたえて さそふ水あらは いなむとそおもふ  
 (29+2)15-754 はなかたみ めならふ人の あまたあれは わすられぬらむ かすならぬ身は  
 (28+2)1-62 あたなりと 名にこそたてれ さくらはな としにまれなる 人もまちけり  
 (27+2)1-35 むめの花 たちよるはかり ありしより 人のとかむる かにそしみぬる  
 (26+2)2-104 はなみれは 心さへにそ うつりける いろにはいてし 人もこそしれ  
 (25+2)1-56 みわたせは 柳桜を こきませて みやこそはるの にしきなりける  
 (28+3)17-903 おいぬとて なとてわか身を せめきけむ おいすは今日に あはましものか  
 (27+3)13-631 こりすまに またもわか名は たちぬへし 人にくからぬ 世にしすまへは

表4 漢字数から見た巻ごと短歌数

巻序\漢字数	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	漢字 延べ	文字 延べ	漢字 比率	
	982	250	267	161	114	72	45	25	13	11	7	2	6	3	3	2	1	2040	28913	7.0
一	61	<u>28</u>	<u>24</u>	7	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	44	1862	2.3
二	62	14	<u>18</u>	11	11	6	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	108	1838	5.8
三	30	9	<u>14</u>	4	2	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	38	898	4.2
四	72	<u>21</u>	<u>19</u>	13	10	3	2	-	1	1	-	1	1	-	-	-	-	137	2128	6.4
五	58	11	<u>19</u>	13	11	3	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	95	1724	5.5
六	25	2	<u>11</u>	6	1	1	-	-	1	-	1	1	-	-	-	1	-	73	722	10.1
七	21	4	2	4	<u>4</u>	<u>5</u>	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	54	621	8.6
八	32	1	6	<u>8</u>	<u>3</u>	4	5	1	2	1	1	-	-	-	-	-	-	109	905	12.0
九	16	2	<u>5</u>	<u>1</u>	<u>2</u>	2	1	1	1	-	-	-	-	-	1	-	-	53	456	11.6
十	35	<u>12</u>	4	<u>5</u>	6	6	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	67	1024	6.5
十一	63	8	<u>23</u>	<u>11</u>	9	6	3	1	2	-	-	-	-	-	-	-	-	131	1865	7.0
十二	60	11	<u>13</u>	<u>10</u>	8	7	5	3	2	1	-	-	-	-	-	-	-	150	1721	8.7
十三	57	13	<u>18</u>	10	7	2	4	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	105	1699	6.1
十四	58	<u>23</u>	<u>17</u>	6	5	2	1	1	-	1	1	-	-	1	-	-	-	93	1735	5.3
十五	82	<u>20</u>	<u>19</u>	<u>17</u>	13	4	4	1	3	1	-	-	-	-	-	-	-	163	2428	6.7
十六	30	<u>10</u>	<u>8</u>	4	3	4	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	49	899	5.4
十七	69	8	10	<u>11</u>	<u>6</u>	8	4	6	1	3	3	-	4	2	2	1	-	304	1901	15.9
十八	63	16	<u>23</u>	9	4	5	5	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	104	1892	5.4
十九	57	10	<u>11</u>	<u>11</u>	6	4	8	3	1	2	1	-	-	-	-	-	-	157	1627	9.6
二十	31	<u>27</u>	3	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6	968	0.6

巻ごとに下線は中央、下線は最頻

- (26+3) 2-83 さくら花 とくちりぬとも おもほえず 人のこゝろそ 風もふきあへぬ  
 (25+3) 4-205 ひくらしの なく山さとの ゆふくれは 風よりほかに とふ人もなし  
 (24+3) 15-801 わすれくさ かれもやすると つれもなき 人の心に 霜はおかなむ  
 (23+3) 9-413 やまかくす 春の霞そ うらめしき いつれ都の さかみなるらむ  
 (26+4) 9-407 わたのはら 八十島かけて こきいてぬと 人にはつけよ あまのつりふね  
 (25+4) 2-92 はなの木も 今はほりうゑし 春たては うつろふいろに人ならひけり  
 (24+4) 11-508 いて我を 人なとかめそ 大舟の ゆたのたゆたの ものおもふころを  
 (23+4) 8-366 すかるなく あきの萩原 あさたちて たひ行人を いつとかまたむ  
 (22+4) 10-428 いまいくか 春し無ければ 鶯の 物はなかめて おもふへらなり

ある漢字数の短歌が何首あるかを巻ごとに見るならば、表4のようである。巻一には表記完全である短歌が61首あり、漢字数0のものが28首、漢字1のものが24首、……、その漢字数の分布にあっては中央値1、最頻値0である。なお、巻一の漢字の延べ字数44、漢字・仮名合計の延べ字数1862、したがって漢字の比率2.3% (=44/1862)である。……。巻ごとに中央値を担う箇所には二重下線を施し、最頻値を担う箇所に一重下線を施す。中央値と最頻値とが同値で

あるときには、中央値の下線のみを施す。

遠藤（2005）は、漢字数が0または1である歌が占める比率を、巻ごとに見る。表4で焼き直して言うならば、巻一85.2%（=（28+24）／61）、巻二51.6%（=（14+18）／62）、……、巻二十96.7%（=（27+3）／31）のように算出される比率である。遠藤はそうして巻一および巻二十の大きさを見、元永本の意図を読み取る。

分布上の片寄り、単なる偶然ではなく、書写者の計算された意図の反映と考えるべきであろう。つまり、初巻と終巻には、当時の和歌の書法としては最も正統的（オーソドックス）な仮名書きを選択しているのである。（p. 233）

巻一および巻二十で仮名が多く漢字が少ないことは、表4最右欄の漢字の比率で知ることができる。

遠藤の指摘も貴重である。しかし、また、表4に、巻一から巻六までの四季の部で、中央値が漢字数1で安定していること、最頻値もそのあたりで安定していることを、見ることもできる。四季の部と並ぶ古今和歌集のいま一つの軸、巻十一から巻十五までの恋の部でも、中央値・最頻値が漢字数1±1に集まる。元永本の作成にかかわった人に意図があったとするならば、そうした安定も見てよいであろう。意図せずにそうなったのならば、漢字1字前後を交えて記すというのが、短歌を記す通念であったということになるであろう。

初めの問題に立ち返ってまとめるならば、元永本古今和歌集では、短歌の平仮名の中に、漢字は、1字程度入り込むことができるかできないかが通常であり、ただ、幾つも入り込むことも珍しくなく、平均をとるならば2字は入り込んだ、ということになる。

#### 参考文献

- 浅田 徹・勝原 晴希・鈴木 健一・花部 英雄・渡辺 泰明  
（2005）和歌をひらく2 和歌が書かれるとき。岩波書店。
- 遠藤 邦基（2005）表記の戯れ。浅田・他（2005）pp. 219-242。  
———（2006）元永本古今集・伝公任本古今集の表記——資料編。  
関西大学、文学論集 56.1 pp. 1-18。
- 小林 芳規（1961）平安時代の平仮名文の表記様式——語の漢字表記を主としてⅠ・Ⅱ。  
国語学会、国語学44 pp. 52-68、45 pp. 60-73。
- 築島 裕（1995）築島裕博士古稀記念国語学論集。汲古書院。
- 築島 裕・石川 洋子・小倉 正一・土井 光祐・徳永 良次  
（1994）古典籍索引叢書2 東京国立博物館蔵本古今和歌集総索引。汲古書院。
- 徳永 良次（1990）元永本古今和歌集の表記——助詞・助動詞等の漢字表記を中心として。  
中央大学、大学院研究年報19 文学研究科 pp. 57-68。  
———（1995）元永本『古今和歌集』の漢字使用の一側面。築島（1995）pp. 543-564。
- 二玄社（1994）日本名筆選 30-33 元永本古今和歌集 伝源俊頼筆  
〈上〉一・二・〈下〉一・二。古谷稔解説、二玄社。